AND SO
THEY
MET

セーラームーンＲＰＧ⓪

And So They Met

深森薫

北の大国・ノワールと東西の大街道とを結ぶショートカットのルート、通称「裏街道」。
途中に曲がりくねった険しい山道があるため、大規模な隊商こそ敬遠するが、小回りの良さとスピードを売りにしている小さな隊商は頻繁に往来する。ゆえに、途中の村々には宿屋もあれば酒場もあり、住人達も山奥の田舎の割には余所者に対して比較的寛大だった。
オリンズも、そんな村々の一つである。

「せーーんせぇーーーー！」
夕日の射す中、大声を上げ、少年が走る。轍の残る赤土の道を、息を切らして。
「せんせぇーー！マーキュリーせんせぇーー！」
そして、少年は古びた石造りの教会の前まで来ると、一層声を張り上げた。
「……ベニー？　どうしたの、そんなに慌てて」
先生、と呼ばれて姿を現したのは、まだうら若い女性だった。少し癖のある、蒼みを帯びたショートの黒髪と群青色の瞳に、透き通るような白い肌がよく映える。身に纏うはグレーの質素な神官衣、胸に輝く銀のペンダントヘッドは、知識の神ラーダの聖印。
「ドザエモンだから先生呼んでこいって、父ちゃんが！」
「えっ」
「ドザエモンまだ生きてるから！　早く来て！」

「ベニー。生きているものを土左衛門とは言わないわ」
『先生』は、先を走り急かす少年の後を追って走りだした。

村の東側には川があり、村の中に水を引き入れるための大きな水車があった。
「おーい、先生、こっちこっち！」
駈けてくる二人に気付いて、水車の横に佇む男が手を振る。がっちりとした体躯の、いかにも農民らしい中年男性。
「グッドマンさん、今晩は」
「挨拶はええから、早よ、この姉ちゃん見てやってくれや！」
農夫の足元には、ずぶ濡れの人影が横たわっている。
「……女性なのですか？」
『先生』は人影の傍に屈み込んだ。
身なりは、ロングブーツに硬革製の防具の傭兵風。肩まである栗色の髪に、陽に灼けた精悍な顔立ち。男と見まがう長身の持ち主だったが、顔の造作や顎から首にかけてのライン、腰周りの曲線は、確かに女性のそれである。
「水車の柵に引っかかってたんだ。いやぁ、たまげたよ、まったく」
水車の周囲には、流木などから水車を守るための柵がある。もしも柵がなかったら、この人物も水車に巻き込まれて無惨な姿になっていただろう。

「辛うじて、息はしていますね」
女の脇腹に目を遣ると、防具に覆われていない部分の服が破れ、血に染まっていた。
「これは……」
刀傷、という言葉を咄嗟に飲み込む。そんな物騒な言葉を迂闊に口にすれば、この行き倒れの傭兵がこの先、厄介事に巻き込まれるのを嫌う村人達に疎まれることになりかねない。
「かなり深手、ですね」
腰のベルトに空の鞘が下がっていることから、何者かと戦い、負傷し、川に転落したのだろうと察しが付いた。
「『偉大なる神、全知なるラーダ。その慈悲もて、彼の者に癒しを与え賜え』———」
『先生』は祈りを捧げた。『神聖語』と呼ばれる、神に仕える者のみが使う言葉である。
女の脇腹に開いていた傷口が、たちどころに塞がってゆく。
「おおっ……」「っす、っげぇ！」
『先生』の言葉は解らずとも、それが『先生』の起こした神の奇跡であることは農夫の親子にも理解できた。
「神聖魔法でできるのは、ここまでです。あとは、体力の回復を待つしかありません。この方の身柄は教会でお預かりしようと思うのですが、グッドマンさん、申し訳ありませんがお手伝いを」
「おう、任せな」
『先生』が話し終わるより先に、農夫は気を失ったままの女を背中に背負って立ち上がった。

*

「う、んぅ……」
言葉ともつかない声が小さく聞こえ、毛布が大きく波打つ。
「……」
暫しの沈黙があって、
「！」
ベッドに横たわっていた女戦士は、毛布を跳ねのけて勢いよく起きあがった。
「気がつかれましたか」
若い女の声がして、そちらを振り向けば、窓から射し込む西日に浮かび上がる白い顔。
声の主は、良かったです、と独り言のように言って、膝の上の本を閉じた。
「……ここ、どこ？　あたし、どうなって……あんたは？」
「順を追ってお答えしますと、ここは裏街道沿いのオリンズという村で、この建物はラーダ神殿です。そして、あなたは川岸に流れ着いているのを村の人に発見されて、ここに運び込まれ、それからほぼ一昼夜眠り続けていました。状況から察するに、何かと戦っている最中に川に落ちたのだと思われますが、その辺りは貴女自身がよくご存じでしょう。それから、私はこの神殿の神官でマーキュリー・アクアフィールドと申します」

女戦士の問いに、マーキュリーと名乗った神官は落ち着いた声で滑舌よく淡々と述べ、以後お見知り置きを、と言って微笑んだ。
「オリンズ……うー、ンなとこまで流されたのか、あたし。よく生きてたな……、あれ」
女戦士は右手で自分の脇腹に触れると、首を傾げ、少し驚いたように自分の体を見回し、
「確か、このへん斬られたはずなんだけど……シスターが治してくれたのかい？」
そう言って、マーキュリーの顔を見る。
「ええ」
「そっか。助かったよ」
ごく簡潔に答えるマーキュリーに、女戦士はありがとう、と人懐こい笑顔を見せた。
「あたしは———」
「とりあえず」
言いかけた言葉を遮られ、
「聞きたいことは山ほどあるのですが。先に、服を着ていただけますか」
マーキュリーに苦笑しながらそう言われて、初めて自分が何も身につけていないことに気づいた女戦士は、ああ、うん、と跋が悪そうに身を縮めた。
「あなたの着ていたものは全部この通り、洗濯して乾かしてありますが、シャツだけは、脇腹の部分が裂けて、血の染みが酷くて」
そう言ってマーキュリーは、丁寧に畳まれた衣類一式をベッドの上に差し出し、

「それでも一応洗って繕ってはみましたが、もしよろしければ代わりにこちらを」
その上に、まだ新しい白いシャツを一着、積み重ねた。
「私が最初にこの神殿に来た時、クローゼットの中に残っていたものです。前の住人が置いていったものなのでしょうが……どこの誰のものとも知れないものですが、それでもよろしければ」
「あー、大丈夫。あたしそういうの気にしないから」
女戦士はそう言って、そのシャツをさっと羽織った。男物のそれは、胸の膨らみも含めて長身の彼女には丁度いい大きさである。
「もうすぐ、日が暮れます。夕食の支度をしますから、頃合いをみて下に降りてきてください」
その様子を見届け、マーキュリーは微笑み一つ残して部屋をあとにした。

ほどなくして、二人はランプの明かりの灯った台所で差し向かいに腰を下ろし、蒸かしたジャガイモと野菜屑のスープだけの粗末な夕食にありついていた。
女戦士は、ジュピター・フォレストと名乗り、隊商などの用心棒を生業にしていると語った。
「……で。今度も、雇われて荷馬車の護衛をしてたんだ。北のトータス・シティから裏街道を抜けて、『銀の街道』を通ってルナル・シティまで」
スープの中でぷかぷかと泳ぐキャベツの芯をスプーンで掬い上げながら、ジュピターは事の経緯を話し始める。

「別に、難しい仕事じゃない筈だった。何度も通ってる道だし、護衛だってあたし一人じゃない。これまでだって、熊だの山賊だのがちょいちょい出ることはあったけど、あたし達の敵じゃなかった。それが――」

言い淀むジュピター。マーキュリーは小さく首を傾げ、黙って続きの言葉を待った。

「……やっぱ、話さなきゃダメ、かな」

きまり悪そうに苦笑するジュピターに、

「お願いします」

淡々と答えるマーキュリー。

「中身にもよりますが、あなたの身に起こったことは、同じ裏街道沿いのこの村にも起こる可能性があるわけですから。人々の安全の為にも、是非」

マーキュリーの言葉に、ジュピターはぐうの音も出ないといった表情でぼりぼりと頭を掻き、やがてゆっくりと口を開いた。

「……ゴブリンに、襲われたんだ」

「ゴブリン、ですか」

「可笑しいだろ？　あんな小鬼どもに、してやられるなんてさ」

自嘲気味に笑うジュピターに、マーキュリーは小さく首を振り、続けてください、と先を促す。

「川沿いの山道を、下ってる時だった。突然、ゴブリンの大群が現れて」

「大群？」

マーキュリーが、何かに引っかかったように復唱する。
「それは具体的に、どのくらいの数？」
「さあね」
ジュピターは肩をすくめた。フォークで無造作に割った芋から、白い湯気がふわりと上がる。
「隊列は縦に長いからね。あたしが相手したのは十匹くらいかな。他の連中も別のとこで戦ってて、お互いに話をする暇もなかったから、他は全然わかんない」
「パーティーの人数は？」
「御者が四人、護衛があたしを含めて四人」
マーキュリーはすっかり食事の手を止め、テーブルの上の一点を見つめてじっと考え込んだ。
やがて、
「ゴブリンの群の中に、ひときわ体の大きなものはいませんでしたか？　あるいは、魔法を使うものが」
ゆっくりと問うマーキュリーに、
「？　さあ、そこまでは……あ、でも、戦ってる途中、先頭の馬車からものすごい火柱が上がってたな。真っ昼間で火の気なんかない筈なのに何で？　って思ったから、よく憶えてる」
ジュピターがそう答えると、マーキュリーは再び考え込み。
「……もしかすると」
一層重々しい口調になった。

「これは、たかが小鬼、どころの話ではないかもしれません」
「どういうこと？」
ジュピターが眉を顰める。
「……ゴブリンの群というのは普通、多くても十数匹が限度です。彼らの知性や理性では、それ以上の規模の社会を維持するのはほぼ不可能ですから。ところが、あなたの遭遇した群は、ざっと見積もって四、五十匹の巨大な群であったと思われます。それに」
マーキュリーは言葉を継いだ。
「あなたは『突然襲われ』、合計八人の護衛と御者が『お互いに話をする間もなかった』と言いましたね。それはつまり、ゴブリン達が隊商の正面からぶつかったのではなく、長い隊列を組んで分散していた護衛を、横から同時に、一斉に襲撃し、分断したということを意味します」
ジュピターもすっかり食事の手を止め、マーキュリーの分析に聞き入っている。
「以上のことから、あなた方を襲ったゴブリンは、かなりの知性を持ったリーダーによる指揮系統を持った、特殊な群であったと思われます」
「リーダー……指揮？　まさか、人間が奴らを操って……？」
「いいえ」
眉を顰めるジュピターに、マーキュリーはかぶりを振った。
「ゴブリンの中には希に、ひときわ体が大きく、力が強く知恵もある『ロード』と呼ばれる変異種がいます。それから、精霊魔法や暗黒魔法を操る『シャーマン』も。そのどちらか、或いは両方がいた

とすれば――状況から考えれば、両方いると考えるのが妥当でしょう。そうなれば」
言葉を選びながら、ゆっくりと、マーキュリー。
「ゴブリンの群といえど、ちょっとした軍隊の、一個小隊並みの力を持っていると考えるべきでしょう。いくら手練れの兵士でも多勢に無勢で、しかも不意を討たれたのでは、ひとたまりもありません」
「……そ、っか」
ジュピターはふ、と微苦笑し、
「たかがゴブリンに後れをとったわけじゃない、ってわかったら、ちょっと安心したよ」
ありがとう、と呟いた。
「いえ」
マーキュリーは小さくかぶりを振って、
「そんなものが街道沿いに現れた、ということは、この村にとっても脅威ですから。貴重な情報に、感謝いたします」
そう言って、微かに笑み。
二人は、すっかり冷めてしまった夕食に再び手をつけた。

*

翌朝。

「ああ。おはよう、シスター」

厨房に降りてきたマーキュリーを、ジュピターが笑顔で迎えた。

「おはようございます……何をしていらっしゃるんですか」

淡々とした口調で、マーキュリー。

「何、って。朝ごはんの支度……あ。もしかして、ダメだった？」

「あ、いえ、そういう訳ではありません。ただ」

家主の不機嫌を察して身を縮めるジュピターに、マーキュリーはやはり淡々とした調子で答え、首を横に振った。

「あれだけの怪我をした上に、半日以上冷水に浸かっていたわけですから。無理はされない方がいいかと」

「ああ、それなら大丈夫。あたし、体力だけが取り柄だし」

咎められているわけではないと知って、ジュピターは破顔する。

「じっとしてるの、性に合わなくてさ。居候の身だし、飯炊きくらいはさせて貰うよ。ところでシスター、火口箱ってどこにあんの？」

ジュピターが問うと、マーキュリーは首を傾げ、一拍置いて、ああ、と頷いた。

「……そういえば、どこにあるんでしょうね」

「へ？」

「ここに住み始めた時に、探してはみたのですが、見つからなくて。結局それっきりになってしまって」
「……」
驚いた、というより呆れたような顔をするジュピターをよそに、マーキュリーはぶつぶつ言いながら竈の前に歩み寄ると、
「『万物の根元マナ――』」
両手で複雑な印を切りながら、更にぶつぶつと呪文を唱えた。日常の話し言葉とも、神官の祈りのことばとも異なる韻律を持つそれは、上位古代語と呼ばれる。魔術師が魔法を行使する時のみに用いる、それ自体が魔法の力をもった言語である。
「『――点せ』」
呪文の完成とともに、ぽっ、と小さな音がして竈の薪から煙が立ち上り始めた。
「魔法……？」
ジュピターが目を丸くする。
「シスター、魔法使えんの？」
「ほんの嗜み程度ですが」
マーキュリーは殊更つまらないことのように答えるが、
「へぇー。ま、確かに、こんな便利な魔法が使えりゃ、火口箱なんて要らないよな。結構面倒だし、こんなにすんなり火ィつかないし」

ジュピターはごく純粋に、感心した。
「……では。お言葉に甘えて、朝食の支度はお任せいたします」
しきりに感心するジュピターに、マーキュリーはそう言い残し、厨房を後にした。

それからほどなく。
「……美味しい」
食卓に出された朝食を口にしたマーキュリーは、思わずそう漏らした。
「だろ？」
得意げに、ジュピターがにやりと笑う。
「ええ。本当に、あの材料で、よくこれだけのものが」
『清貧』を地でいく、神殿の食糧事情。それは家主であるマーキュリー自身が一番よく知っている。
「酒場で、コックやってたこともあるんだ。あたし」
「そうですか、それで」
納得、という風に頷くマーキュリー。
「用心棒の仕事にあぶれちゃったことがあってさ。食いつめて、仕方なく、だったんだけど、これが結構面白くてね。いっそ、傭兵やめてコックで食っていこうかな、なんて思ったりもしたけど、やっぱ、向いてなかったんだよな。客商売」

蒸かした芋をフォークで割って、ジュピター。ふ、とついた溜息に、ふわりと上った白い湯気が渦を巻いた。
「そうですか？」
そんな風には見えませんが、とマーキュリーが首を傾げ、小さく笑う。
「それが、えらく酒癖の悪い客がいてさ。あんまり他の客や店の女の子に絡むもんだから、あったま来てぶん殴っちゃったんだよね。そしたらそいつの連れとか巻き込んで大喧嘩になって、気付いたらそいつら全員ボコボコにしちゃっててさ。そんで」
ジュピターはそう言って舌を出し、右手で首を切る仕草をし、肩をすくめ、そして笑った。
マーキュリーもつられて笑い、
「けど、そのおかげで、私は今こうして美味しい芋が食べられるわけですね。同じものを同じように蒸かしただけなのに、こんなに味が違うなんて」
その酔っ払いさん達には悪いのですが、と、申し訳のようにつけ加えた。
「芋、ね。居候の身で言うのもなんだけど。ここの食料庫、芋ばっかじゃん。シスター、よく、あれでやってけるね」
ジュピターは少し呆れたようにそう言ったが、
「村の皆さんのご厚意で、養って戴いている身ですから」
「あー……そう」
それで十分です、と涼しい顔で返されて、それ以上ツッコむのを諦めた。

「ところで、シスター。他に何か手伝うこと、ないかな」
諦めて、別の話題を振る。
「炊事の他に、あたしにできそうなこと。できれば、力仕事とか、頭使わなくていいのがいいんだけど」
マーキュリーは、そうですね、と顎に手を添え、暫し思案し、
「では。まず、その『シスター』という呼び方をやめていただけますか」
そう言って、微笑した。
「何だか教団の本院に戻ったようで、落ち着かなくて」
「え？　あ、うん。じゃあ、えっと……何て呼んだらいい？」
「名前で結構です。覚えていらっしゃいますか？」
どぎまぎするジュピターをからかうように、悪戯ぽい笑みを浮かべて、マーキュリー。
「や、覚えてるよ、勿論。えっと……『マーキュリー』……さん？」
「私はそんなに年上に見えますか？」
「んー、じゃ、『マーキュリー』？」
「それで結構です」
ジュピターが言うと、マーキュリーは満足げに頷いた。
「私も貴女のことは『ジュピター』と呼ばせて戴きますから。……それではジュピター、薪割りをお願いしてもいいでしょうか」

そう言われてジュピターは、お安いご用さと笑って、皮のついたままの芋を頬張った。

＊

それから二、三日は、何事もなく過ぎていった。

そんなある日の、昼下がり。

「せんせぇーーっ！」

息を切らし、少年が走る。年の頃は十一、二くらいだろうか。陽に灼けた顔を涙で濡らしながら、口を大きく開け、息も絶え絶えに、走る。

「せんせぇっ、せんせぇっ、せんせぇっっ！」

少年は神殿の庭に入ると一層声を張り上げ、神殿の扉を激しく叩いた。

「せんせぇっ！　助けて！　ニールが、ニールが！」

マーキュリーが扉を開けると、少年は息を切らし、しゃくり上げながら喚き散らす。

「落ち着いて、ポール。ニールがどうしたの」

マーキュリーは少年の目の高さに屈み込んで、静かな口調で尋ねた。ニール、というのは、彼女がポールと呼ぶこの少年の弟だ。この小さな村では誰もがお互いに知り合いで、誰もが余所の家の家族構成まで熟知している。

「薪割りしてたら、ニールが、やりたい、っていうから、やらせてやったら、足切っちゃって、足が

切れちゃって、すごい血が出て――」
少年の言葉に、マーキュリーの表情が変わった。
行きましょう、と静かに答えて立ち上がると、裏庭から騒ぎを聞きつけ何事かと駆けつけたジュピターに目配せをし、少年の家を目指して共に走り出した。

そこには、近隣の住人達でちょっとした人垣ができていた。
「先生！　こっちこっち！」
マーキュリーの姿を見つけ、隣家の主人が手を振る。
彼女が近づくと、人垣がすっと割れ。
「ニール……ニール！　しっかりおし、あぁ――」
視界に飛び込んできたのは、地べたに横たわる少年と、傍らにへたり込み、その頭を膝に乗せ、我が子の名を繰り言のように呼び続ける母親。
「先生！　早く……早く治してやってくだせぇ！」
悲壮な声を意識の端で聞きながら、マーキュリーは素早く状況を見る。
少年の右脚は脛のあたりで切断されていて、足元の地面には血溜まりができていた。切れた脚の先には布が掛けられ、荒縄で縛られている。
「……適切な処置ですね」

マーキュリーは感心した。誰がやったのかは知らないが、良い判断である。怪我の程度と経過した時間の割に血溜まりがさほど大きくないのは、その所為だろう。千切れた足は、血溜まりの中に転がっている。

彼女は周囲をぐるりと見渡した。集まった村人達は皆一様に狼狽し、動揺と同情の色をその目に宿している。この少年は果たして助かるのだろうか。助かったとしても、この脚では、遊び盛りの少年が走り回ることもできないし、大人になっても満足に畑仕事もできないだろう。なんと不憫なことだ——誰もが、そんな顔をしていた。

「ジュピター」

マーキュリーは、後ろに控えていたジュピターを見た。

「私が呪文を唱える間、この脚の切り口同士を合わせておいて貰えますか。できるだけぴったり、ずれないように、離れないように」

「……できるの？　そんなこと」

ジュピターはマーキュリーの意図を汲み取り、少年の足元に跪きながら、少し驚いたように尋ねた。

「わかりません。ですが、たとえ失敗しても、このまま傷が塞がるだけですから。やってみる価値はあるかと」

「わかった」

村人達は、固唾を呑んで二人の遣り取りを見ている。

「いくよ」

マーキュリーが頷いて応えると、ジュピターは脚を縛っていた荒縄を解き、布を取り払った。
途端に、傷口から鮮血が溢れ出す。
ジュピターは素早く、千切れた足の切り口を脛のそれに押し当てた。
「……いいよ！」
「———『偉大なる神、全知なるラーダ。その慈悲もて、彼の者に癒しを与え賜え』」
ジュピターの合図で、マーキュリーは呪文を唱えた。人々が普段話しているそれとは違う、神官の祈りを神へ届けるための言葉。彼女以外にそれを解する者は此処にはいないが、彼女が神への祈りを捧げたことだけは察することができた。
ジュピターが、少年の脚にべっとりと纏わりついた血を掌で拭う。
と、切れ目のない、一続きの綺麗な肌が現れた。
「おおっ！」
「なんと……」
「……奇跡だ！」
神の業を目の当たりにした人々はどよめき、口々に驚きの念を表し。
「ああっ……ニール、ニール！……ありがとうございます、ありがとうございます！」
安堵した母親は、はらはらと涙を流しながら感謝の言葉を口にした。

集まった村人達が一人二人と仕事に戻ってゆき、マーキュリーとジュピターの二人も神殿へと戻っていった。
「……マーキュリーって、さ」
その道すがら、ジュピターが口を開いた。
「やっぱ、普通のシスターとは違うよね」
「……どうして、そう思うのですか」
無表情で、マーキュリーが問い返す。
「あたし、商売柄、自分や仕事仲間がよく怪我するんだよね。大抵は、自分たちで手当てすんだけど」
ゆっくりと歩きながら、ジュピターは言葉を続ける。
「時々、手に負えないような大怪我することもあって。そういう時は、近くの神殿にかつぎ込むんだ。そしたら、大抵のシスター――シスターに限らず、大抵の人は、血まみれの人間を見て、驚いて、怖がったり、中には卒倒しちゃう人もいてさ……あ、マイリー神殿だけは違ってたかな」
そう言ってジュピターは、まるで楽しい思い出話でもするように、小さく笑った。マイリーとは武勇を司る神であり、故にマイリー神官には荒事を厭わない者も少なくない。
「けど。さっきのマーキュリー、すごい冷静だったろ？　怖がるどころか、動揺もしてないみたいで。なんていうか……慣れてる？　血とか、怪我人とか」
「そうですか」

歩きながら、マーキュリーは淡々と応えた。
「別に、慣れているわけではありませんが。冷めているのは、単に私個人の性格かと」
「冷めてる、っていうのとは、違う気がするけどな」
肩をすくめて、ジュピター。
「あの子の兄貴が呼びに来たとき、血相変えて駆けつけたじゃないか。そういうの、冷めてるとは言わないよ。村の人たちにだって、すごい頼りにされてるしさ」
マーキュリーは答えなかった。
ジュピターもそれ以上は何も言わず、そうこうしている間に、二人は神殿まで帰り着いた。往く時には長くもどかしく感じた距離が、帰りは存外あっけなかった。
「……ま、何にしても」
再びジュピターが口を開く。
「あの子はマーキュリーのおかげで助かった。神官なら誰でも同じことができたかっていうと、そんなことはないと思うよ」
そう言って、神殿の裏手へと歩いていく彼女の背中を、マーキュリーは黙って見送った。

*

聡明な神官が予期し、恐れていたその「時」は、存外早く訪れた。

「先生っ！　先生ぃぃっ！」
早朝、神殿の前庭を箒で掃いていたマーキュリーの元に、一人の農夫が、年老いた母親を背負って駆け込んできた。
「たいへんだっ！　もっ、モンスターがわんさか村の方に近づいて来てるって！」
「っ――」
息を切らしながら、もつれる舌で懸命に紡がれたそのひとことで、彼女は全てを察した。
「バカラックさんが、走って知らせに来てくれて……いま、村のみんなに知らせて回ってるだ！」
バカラック、というのは、村の北に猟師小屋を構える猟師の名前だ。恐らく、例のゴブリンの軍団が街道沿いに南下してきたのだろう。
「早く、神殿の中へ」
マーキュリーは農夫の親子を礼拝堂の中に入るよう促した。村の中で最も古い建物であるこの神殿は、古代魔法文明時代のものであるとも言われ、村で最も頑丈な建物であるとして有事の際の避難所となっている。
目を凝らし、耳を澄ませば、風に乗って、遠く、不穏な喧噪が聞こえ、こちらに向かって駈けてくる人影がちらほらと見える。
マーキュリーは神殿の厨房へと向かった。
「ジュピター」
彼女が呼ぶと、ジュピターは芋を剥く手を止め、何？　と首を傾げる。

「例のゴブリンの軍団が、攻めてきたようです」
唐突な報告に、ジュピターは目を見開いた。
「いま、村の人達が次々にこの神殿に避難してきています。申し訳ありませんが、みなさんを礼拝堂に誘導していただけますか。そして、村長さんと協力して、人数を確認したら、中から閂をかけてください」
「ちょ、マーキュリー！」
「あ、そこの勝手口も、鍵を掛けておいてください」
お願いします、と早口で告げて踵を返すマーキュリーを、ジュピターは大声で呼び止める。
「お願い、って。自分はどこ行く気だよ」
「……私は少し、やるべきことがありますので」
自室にいますから、とマーキュリーは抑揚のない声で言い残し、足早に去っていった。

ほどなく村人皆を招き入れ、礼拝堂の分厚い木の扉に内側から巨大な閂をかけると、ジュピターは階段を勢いよく駆け上がった。
「マーキュリー！」
そして、二階のマーキュリーの部屋の扉を、ノックもせず不躾に開けば、
「マ———」

部屋の主は、淡いラベンダー色の法衣を纏ってそこにいた。普段彼女が身につけている簡素な神官衣とは異なる、分厚い生地の衣。司教や司祭などというものに出会ったことのないジュピターにも、それがそれなりの神殿の、高位の僧侶の証であることは察しがついた。

「皆さんは、ご無事ですか？」

この緊急事態には不似合いな、落ち着いた口調で、マーキュリー。

「あ、ああ……大丈夫」

ジュピターは思わず、素直に頷いた。

「……マーキュリー……その格好は？」

「生憎私は、鎧を持っていませんので。せめて、一番生地の分厚いものを、と思って」

「はぁ!?」

ジュピターの声が裏返る。

「ちょ、鎧って、まさか」

「……もしも、ゴブリン達の目的が物資の略奪なら」

それとは対照的に、マーキュリーの声は酷く落ち着いていた。

「しばらく隠れて待っていれば、彼らは作物や家畜を奪って、さっさと引きあげていくでしょう。ですが、もしも彼らの目的が人間への復讐、殺戮そのものだとしたら、彼らはここに逃げてきた人々を狙ってくるでしょう。そうなれば、いくら待ったところで、災厄は通り過ぎてはくれませんし、助けに来てくれる人がいるわけでもありません。ですから」

――そのときは、こちらから打って出ます。
マーキュリーはそう言って、アルカイックに微笑んだ。
「ちょっ、何バカなこと言ってんだ！」
ジュピターが声を荒げる。
「相手は何十匹って――ちょっとした軍隊並みだって、あんたが言ったんだろ!?　戦士でもないのに、無茶だ、命が幾つあっても足りないぞ！」
「勿論、勝算がないわけではありません」
ジュピターの大声にも動じることなく、マーキュリー。
「ヴァナヴァラ、という国をご存じですか」
「ヴァ……？　いや」
聞いたことないな、ジュピターは眉を顰める。
「この大陸の、はるか東にある国です。あまり知られていないことですが」
静かな口調で、マーキュリーは言葉を続け。
「その国には、魔術師や神官だけで編成された、魔導軍というものがあります。歴史はまだ浅いものですが、私はその魔導軍の総指揮を任されていました。ですから、私が普通の神官とは違う、血を見慣れている、という貴女の見立ては、正しかったわけです」
淡々と語りながら、彼女は戸棚の引き戸を開き、革の巾着袋をひとつ取り出し、
「私にとっては、血の流れる様も人の焼ける臭いも、水の流れる様や芋の焼ける匂いと同じくらい、

日常的なものでしたから」
そう言って、自嘲気味に、微笑んだ。
「……見てください」
ジュピターが返す言葉を見つけるより先に、マーキュリーは窓を開け、外を指さした。村のあちこちから煙が上がっているのが見て取れる。
「ゴブリン達が、火を放ったのでしょう。略奪が目的なら、無人の家屋にわざわざ火を放つ理由はありません。やはり、彼らの目的は破壊と殺戮、人への復讐のようですね」
「……行かせないよ」
ジュピターは、部屋のドアの前にたちはだかった。
「マーキュリーがただの神官じゃない、魔術師で元軍人だってことは分かった。けど、だからって、一人で何とかしようなんて、いくら何でも無茶だ。どうしても行くっていうなら、あたしをぶん殴って行きな」
「……それは、困りましたね」
マーキュリーは苦笑し、さして困った風でもなくそう言うと、窓の外に目を遣りながら、なにやら呪文を唱え、両手で印を切り。
「では、ここから失礼します」
窓枠に手を掛けると、上半身を外へ乗り出し、頭から窓の外へ落ちた。
「!?」

ジュピターが慌てて窓に駆け寄ると、体勢を整えながら、鳥の羽のようにゆっくりと落下するマーキュリーの姿が見えた。

ふわり、と地面に降り立つと、マーキュリーはまず、礼拝堂の入り口の脇に立てかけてあった箒を手に取ると、建物を中心に大きな弧を地面に描いた。

ゴブリンの軍団はもう、目視できる距離にまで迫っている。

マーキュリーは革袋の口を開いた。中には、仄かな青白い輝きを放つ石———魔晶石と呼ばれるもの———が、ぎっしりと詰まっている。

魔晶石とは古代魔法王国時代の遺物で、岩石に人工的に魔力を注入して作られたものである。現代ではその製法は失われてしまったものの、当時は通貨としても用いられ、膨大な量が生産されたため、今でもあちこちの遺跡などでしばしば発見され、それなりの値段で取引されている。

彼女は魔晶石を一つ取り出し、足元の石ころを拾い上げると、呪文を唱え始めた。

喧噪が、どんどん近くなる。

「『万物の根元マナ、此等が礫に宿りて、現し身を成し、仮初めの命を与えよ』」

彼女の両手が、複雑な印を切る。

「『ひととき我が忠実なる僕となりて、我に仕えよ』」

彼女の手から放たれた二つの石ころが見る間に膨張し、人の形を成した。

普通の人間大の大きさではあるが、立派なストーン・ゴーレムである。
「『我、汝に使命を与えん。あの線を踏み越えて近づいて来る、人ならざる者どもを打ち払え』」
ゴーレム達はマーキュリーの言葉に従い、地面にひかれた線に沿って並ぶと、迫り来るゴブリンの軍勢に向かって身構えた。
ゴブリン軍団の足音が地鳴りのように響く中、マーキュリーは次々とゴーレムを生みだし。
がづっっっっ！
七体目が生まれるとほぼ同時に、ゴーレム達とゴブリンの軍団が接敵した。
金属と石とが激しくぶつかりあい、擦れあい。
甲高い摩擦音のような、ゴブリン達の雄叫びが渦巻く。
「『力よ』！」
ゴーレム達の防衛線をすり抜けてマーキュリーに迫ったゴブリンが、不可視の衝撃波に撃たれ吹き飛んだ。ゴーレムを生み出した呪文のそれとは異なる韻律を持つ、『神聖語』の呪文である。
どぐっっ！
骨の砕ける音がして、一体、また一体、ゴブリンの体が宙を舞う。
一個、また一個、魔力を使い果たして輝きを失った魔晶石が、マーキュリーの足元に転がった。
ごっっ！
次々に押し寄せるゴブリン達の攻撃に耐えかねたストーンゴーレムの一体が崩れ落ち、開いた穴からゴブリンが一気に押し寄せる。

「『力よ』っっ！」
咄嗟に放たれた呪文が、数体を一気に吹き飛ばした。
それでも途切れることなく、敵は押し寄せる。
ゴブリンが、錆びた剣を振りかざす。
呪文は、間に合わない。
「っ――――」
ざぐっっ！
マーキュリーの眼前に迫っていたゴブリンが、剣を振り上げた姿勢のまま、不意に仰け反った。飛んできた手斧に文字通り脳天を割られ、血飛沫を散らしながら後ろに倒れる。
「でぇぇりゃあぁぁぁっっ！」
気合いの声とともに、マーキュリーの背後から、横をすり抜けて飛び出したジュピターが、斧を振るった。いつものシャツ一枚の軽装ではなく、初めて出会った日、川岸に流れ着いた時に身につけていた硬革鎧を身に纏ったその姿は、いかにも歴戦の傭兵らしい。
ごしゅっ！
続いて飛び出してきたゴブリンが、薙ぎ倒される。彼女が振るっている斧は、あまりに大きく、重すぎて使い物にならないと、物置でずっと眠っていた代物だ。
がしゅっ！
返す刃で、もう一振り。

ジュピターの斧で、ゴブリン軍団は再びゴーレム達の防衛ラインまで押し戻された。
「『万物の根元マナ、此等が礫に宿り――――』」
一瞬呆気に取られていたマーキュリーだったが、気を取り直し、再び呪文を唱える。魔力を失ってただの石ころに戻った魔晶石を依り代に、新たに二体のゴーレムが生み出された。
「……凄いな。こんな魔法、初めて見た」
また飛び出してきたゴブリンを斧で屠り、ジュピターは心底感心したように言った。
「こんなことができるんなら、そりゃ、一人で向かっていこうなんてバカなことも言うよな」
「ジュピター……」
「あのさ」
少し困ったような表情をみせるマーキュリーが何か言おうとするのを遮って、ジュピターは言葉を継いだ。
「マーキュリー、あたしのこと、ヘボ戦士だと思ってるだろ。……ま、確かに、ゴブリン相手に死にかけたのは本当だけどさ。けど」
そして、石人形の間をすり抜けて斬りかかってくるゴブリンを、自分はかすり傷一つ負うことなく次々に叩き伏せながら、
「背中さえ取られなきゃ、こんな奴らに後れはとらないから。ちょっとは、頼りにしてくれてもいいと思うよ」
そう言って、にやりと不敵な笑みを浮かべて見せる。

マーキュリーの声は剣劇の音と渦巻くゴブリン達の怒号にかき消されたが、彼女の唇がありがとう、と動くのを見て、ジュピターは満足げに笑った。

一進一退の、膠着状態。

前線を保っている石人形が崩れ落ちるたび、ジュピターがゴブリンの軍勢を押し戻し、マーキュリーが再び魔法でゴーレムを生み出す。辺りには血の臭いが充満していたが、鼻の感覚はすっかり麻痺してしまっていて最早何も感じない。敵の戦力は確実に削っている筈だが、終わりは見えなかった。

「ったくっ、キリがないな！」

ジュピターが苛立ちを露わにする。さすがに、疲労の色は隠せない。

「そうね……リーダーを――ロードとシャーマンを落とせば、決着は着く筈なのだけど」

近づいて来たゴブリンを神聖魔法の一撃で吹き飛ばして、マーキュリー。魔法の種類如何にかかわらず、呪文の詠唱には高度な集中力を要するため、延々と魔法を使い続けている彼女は相当に疲弊している筈だった。

「問題は、そいつらがどこにいるか……それにしても、こいつら邪魔だな。マーキュリー、何か、派手な魔法ない？」

ふと、ジュピターがそんなことを言った。

「？　派手な、って」

「なんか、でかい音がするとか、爆発するとか。ザコどもがビビって逃げ出しそうなやつ」
「ああ。そういうことなら」
マーキュリーは頷いて、呪文の詠唱を始めた。
「『万物の根元マナ、我が手に集い、雷となりて、ただひとすじに――貫け』！」
ばりばりばりばりっっっ！
『力あることば』の解放とともに、強烈な光が轟音を伴って一直線にほとばしる。古代語魔法の『雷光（ライトニング）』の術である。
魔術によって生み出された雷は、ゴブリン達の密集地帯を一直線に貫き、瞬時に灼き尽くす。それを目の当たりにした他のゴブリン達は、急に浮き足だった。
「さっすが」
ひゅぅ、と口笛を吹いて、ジュピター。
「……その代わり、高くつきますが」
マーキュリーは苦笑して、光を失った魔晶石の残骸を足元にころりと落とした。
「魔晶石、っつーんだっけ？　それ。すんごい高いんじゃなかったっけ」
「ええ」
「それがその袋いっぱいとか……それだけあったら、どんくらいすんの？　ぶっちゃけ」
「そうですね」
尋ねるジュピターに、マーキュリーはしばし思案し、

「お金にすれば、都会で豪邸が一軒買える程度、でしょうか」
さらりと、そう答えた。
「ごっ……えぇ!?」
突拍子もない数字に、ジュピターの声が上擦る。
「国を抜け出す時に、退職金代わりにこっそり戴いてきたものですから」
心配は無用です、と。
マーキュリーは悪びれもせず、微笑んでそう言ってのけた。
「で。いま、どんくらい使ったの？」
そして、ジュピターが恐る恐る尋ねると、
「屋根と、二階がごっそり吹き飛んだ感じ、でしょうか」
やはり、何でもないことのように、マーキュリー。
「うわぁ」
一体、金にするとどのくらいの金額になるのか。
ジュピターは考えようとして、やめた。
「……って。あんまし余裕こいてもいられないな」
「でも。高くついても、これはやる価値が十分にありますね」
マーキュリーはそう言って、再び呪文の詠唱に入る。

ばりばりばりばりっっっ！
ばりばりばりばりっっっ！
密集するゴブリンの軍勢に、立て続けに二発。
突然の得体の知れない魔法、目の前で次々に灼かれる仲間。ついにゴブリン達は恐慌状態に陥り、逃亡するものが現れ始めた。
ごぅあぁぁぁっっ！
と、ひときわ大きく野太い、獣の咆哮のような音が辺りに響きわたる。
「いた！」
逃げまどうゴブリンの群の中に、仁王立ちするシルエット。普通のものよりも、一回りどころか二回りも三回りも大きな体躯を持つ異形。ゴブリン達を統べる、王である。
ごがげごぐがおぉぉっ！
王の叫び声に、逃亡しようとしていた者たちが足を止める。
「……まずいな」
パニックを起こしていたゴブリンたちが落ち着きを取り戻しはじめたのを見て、ジュピターは舌打ちをした。
そして、
「マーキュリー、ごめん、後よろしく！」
そう言って、返事も待たずに飛び出した。

マーキュリーが驚いた表情を見せたのは一瞬。今が勝負を賭けるタイミングなのだとすぐに悟り、呪文の詠唱を開始した。

「『万物の根元マナ、此等が礫に宿りて――我に仕えよ』！」

そして、呪文が完成すると同時に、走るジュピターの背中に向かって石つぶてを投げる。石は空中で一気に膨らみ、四つの人形となって地面に降り立った。

「『我、汝に使命を与えん。彼の者に近づく異形の者を打ち払え』！」

命を受けたストーンゴーレム達は、マーキュリーの思惑通り、ジュピターを背後から狙うゴブリンを迎え撃つ。

「そこをどけぇっ！」

行く手を阻む雑魚を斧で薙払い、

「どぉぉりゃぁぁっっ！」

ゴブリンロードに、正面から斬撃を叩き込む。

ぎぃんっっ！

濁った金属音がして、ジュピターの斧が宙を舞った。

いくら大振りで頑丈とはいえ、野良仕事用の斧は戦斧とは作りが異なる。度重なる打ち合いの衝撃に耐えかねて、柄が折れてしまったのだ。

「……ちっ！」

ジュピターは舌打ち一つして、残った柄の半分を放り投げると、予備の剣の代わりに腰に帯びてい

た鉈を手に取った。
ぐぅおぉぉんっ！
雄叫びをあげ、ゴブリンロードが剣を振るう。
紙一重でかわし、ジュピターが間合いに踏み込んだ。
ざっっ！
手応えがあって、ロードが血飛沫とともに苦悶の声を上げる。大斧と比べれば随分見劣りがする得物だが、それでもジュピターの腕力をもってすれば相手に深手を負わせることは十分に可能だった。
「食らえっ……！」
止めの一撃とばかり、ジュピターが再び鉈を振り上げた瞬間、
ごぅっっっ！
炎が、意志を持ったもののようにジュピターに絡みつく。
「うぉっ⁉」
咄嗟に後ろに跳び退くジュピター。一瞬まで彼女が立っていた地面を、ゴブリンロードの剣が抉った。
「うわっっ！」
ロードの後ろに控えるように立っていたゴブリンが怨嗟のような声を発した瞬間、無数の石つぶてが地面から突き上げるようにジュピターを襲う。たまらず、ジュピターはその場に膝をついた。
再び、怨嗟のような声。

ロードの傷が、癒えてゆく。
　ぎぃんっっ！
生命力を取り戻し、ゴブリンの王は再び斬りかかってきた。
その刃を、ジュピターは辛うじて受け止める。
『ゴブリンには、希に魔法を使うものが存在します』
「……くっそ……！」
マーキュリーの言葉を思い出し、ジュピターは舌打ちをした。
そうしている間にも、ゴブリンの魔法使いは新たな呪文の詠唱に入っている。
　どっっ！
不可視の衝撃波に打たれ、ゴブリンの王と魔法使いの体が吹き飛ぶ。そして、体を苛んでいた熱と痛みがすぅ、と引いてゆく感覚を覚え、ジュピターは首を巡らした。
気配を求め、視線を上に動かせば、ジュピターの少し後方、大人の背丈二人ぶんほどの空中に、マーキュリーが浮かんでいるのが見え。
「うぉっ!?」
魔術師と組んで仕事をした経験の殆どないジュピターにとっては、これまた初めて見る魔法だった。
「……できれば、あまり下から見上げないで欲しいのですが」
軽くスカートを押さえながら、マーキュリーが苦笑を浮かべる。
「うわ、ごめっ……！」

ジュピターは少し慌てて視線を前に戻し、再び斬りかかってくるゴブリンロードの刃を受け止めた。
そしてゴブリンシャーマンはというと、覚束ない足でゆるりと立ち上がり、呪文を唱え、自らの負った傷を癒した。
「王よりも、我が身を取りましたか」
そう呟いて、マーキュリーが掌をシャーマンに向け、短い呪文とともに放った強力な一撃は。
「――『力よ』！」
シャーマンを永遠に沈黙させるに十分な威力を持っていた。
　ぐるぅおぉぉぉんっっ！
ゴブリンロードが叫んだ。
双眸ぎらぎらと血走らせ、ジュピターに向かって剣を振り下ろす。
「人間さまを――」
　ぎぃんっっ！
ジュピターは下から振り上げる鉈の一撃で、その剣を弾き返し。
「なめんなぁっっ！」
返す刃を、ロードの首に叩きつけた。
鮮血が迸り、断末魔の声が響きわたる。
ゴブリン達が、一斉に動きを止めた。
やがて、ゴブリンの王の体がばたり、と地に伏せば。

パニックに陥ったゴブリン達は元来た道を脱兎の如く逃げ出した。

やがて敗走するゴブリン達の姿が遠く見えなくなり、教会の前庭には、おびただしい数のゴブリンの死体と落としていった武器、そして敵がいなくなり手持ち無沙汰になった石人形達が残され。

「……っづぁーーー！　終わった！」

ジュピターは天を仰ぎ、鉈を放り出すと、その場にへたり込んだ。

「……そのよう、ですね」

マーキュリーも静かに地面へ降り立つと、ジュピターの背中に自分の背中を預けるように、座り込む。

「……凄いな。ほんとに何とかなったよ……」

乱れた呼吸を整えながら、ジュピター。

「……そうね」

気怠そうに、マーキュリー。

「あー……もう無理。マジ無理。もう指一本動かすのも面倒臭い」

「私も……横になって目を閉じたら、そのまま気を失ってしまいそう」

口々に、溜息混じりに呟いて。

しばしの、沈黙。

「……ジュピター」
マーキュリーが、沈黙を破った。
「うん？」
「……今、私は生まれて初めて、魔導の訓練を積んでおいて良かった、と思っています」
もう少し修行しておけば良かったと思うくらい、と、少しおどけたように言うと。
「ん。そっか」
そりゃ良かった、と、ジュピターは頷いた。
再び、しばしの沈黙。
「マーキュリー」
今度はジュピターが、沈黙を破った。
「旅、しない？　あたしと一緒に」
「……旅？」
首を傾げるマーキュリーに、ジュピターはうん、と頷いて。
「山賊とかモンスターとかに困ってる人って、あちこちに結構いっぱいいてさ。用心棒って、割と仕事に困んないんだよね。ヤクザな商売だけど、人助けして食ってけるんだから、あたしは結構気に入ってる」
どうかな？　と水を向けると。
「そうですね」

前向きに考えてみます、と。
そう言って、マーキュリーは微笑んだ。

———And So They Met・終

セーラームーンRPG⓪　And So They Met
著　深森薫
表紙　飛鳥圭

2013年 12月　初版発行
2023年　4月　PDF化にあたり加筆修正

発行者　Bitter & Sweet （深森薫）
http://mimorikaworu.yomibitoshirazu.com/